

閲覧ニュース

31号

1981. 7

前期試験に備えて

1) 開館時間について

平日；9時から6時

土曜日；9時から1時

但し、7月4日、7月11日の両土曜日は
3時まで開館

2) 一部図書の貸出期限変更について

試験期になると、一部の図書に利用が集中
します。このため、予約の多いものに限り、
一夜貸し、三日貸出等の措置をとることが
あります。

3) 複写について（平常どおりです）

午前中（12時30分まで）受付分は1時
以降渡し。

午後（4時まで）受付分は4時30分以降
渡し。

※ 午後4時以降の受付分は翌日扱いとなり
ます。なお図書館の資料に限ります。

夏休み中のお知らせ

夏期休暇中の閉館、貸出等については
下記のとおりとします。

1) 長期貸出

貸出期間 7月17日(金)～
9月17日(木)

貸出冊数 1人5冊
(但し雑誌は対象外)

2) 開館時間の変更

8月中の開館時間は次のとおりです。

平日 10時から3時まで

土曜日 10時から1時まで

3) 閉館

8月17日(月)～8月22日(土)

カウンターから

最近図書の貸出冊数に対する質問が多くなっ
ています。本図書館の貸出冊数は手持ち5冊と
いう考え方ですので、仮に今、貴方が2冊借り
ていましたらその2冊を返さない限り、今度借
りられる冊数は3冊までです。
これは極端な考え方をしますと（実際にそうす
る方もいます）、毎日一度に5冊ずつ借りて、
翌日、それを返却し、又、次の5冊を借りて行

くことが出来るということです。質問の多くの
場合が「2冊借りられますか？」「3冊までで
すよね？」といった形のものです。5冊という
のは考えられないような数字なのかなと思っ
たりして私達の方が戸惑います。

私達のPR不足も大きいと思います。

「閲覧者の皆さん 貸出冊数は5冊です」

「カー・グラフィック」について

前 田 富士男

あなたの休日の趣味が自家用飛行機の操縦であったとする。それも、おとなしいセスナなどではない。スピッツのような、かなり戦闘的なスポーツ・タイプ複葉機であったとしよう。そして、あなたのお宅の門から入ってかなり速い所に位置するガラージュには目下3台目の車が入っていない。スピッツが翼を休めるヤードにふさわしい車を選ぶとなると、あなたはどのディーラーの電話番号をメモされるだろうか。あるいは、あなたのアパートの駐車場にはせいぜい1200ccクラスのタイプしか置けないとする。渋滞する都心に毎日の通勤の足として使わざるをえず、しかも休日には2人の子供と奥さんを乗せて行楽地に向かわなければならない。何よりも、維持費、燃費、性能のバランスが肝心である。となると、あなたは中古車展示場からどのような車を選ばれるだろうか。

自動車雑誌と呼ばれる書物が読者に提示する世界は、一方では強烈な仮象にもとづき、他方では事物そのものである現実にもとづく、力動的な心象世界にはかならない。マラリューというレプリカ・モデルを選択するにせよ、ダイハツ・シャレードを選択するにせよ、いずれも、ひとつの形態と機能と価格をもつ確固たる現実の存在物である。しかし同時に、いずれの自動車も、さきの設問と解答のプロセスを享受する読者にとっては、その読者がその車を現実にも所有するか否かとは別な次元で、すなわちイメージの次元において徹底的に追体験される。現実の自動車——読者——イメージの自動車という、モーター・ジャーナリズムのパラダイムは、したがっていわゆる情報誌のそれとは決定的に異なる。情報誌における読者および書き手にとっては、情報の対象をあくまで「現実的」に獲

得することが前提となるからである。自動車雑誌は情報誌ではない、それは、むしろ、古くから存在する「案内記(チチェローネ)」の現代的発現なのだ、と言ったらモーター・ジャーナリズムの発散するヒロイズムに迎合しすぎることになるだろうか。そうでもあるまい。単なる一機械としての自動車を醒めた眼でとらえつつ、しかもチチェローネとしてのエクリチュールを意識し、ときに、この鉄とプラスチックとゴムの固まりに文化を語らせる——そうした力量をもつモーター・ジャーナリストは、今日の日本では数少ない。おそらく、そのひとりとは、「カー・グラフィック」誌編集長の小林彰太郎であろう。

自動車雑誌のつくり出すイメージの世界には、また、一種の危険がつきまといっている。たとえば、ある人がこう語るとしよう。「スポーツカーと違って制約の多いスポーツセダンというカテゴリーを代表する今日の車のひとつはBMWである。自動車は機械である以上、性能と状況が許す安全範囲内で出来るだけ早く走るべきだというのが私の考えだが、3リットルのBMWではその速度は、私の体験によれば、170Km/hである。この速度で、何時間も何日間も旅行する。こうした体験がなければ、スポーツセダンについて発言することは出来ない。」もしこのような発言がなされた場合、さきにあげたエクリチュールは崩壊する。ここでは、生硬な体験が表現を破壊しているからである。しかし、体験にもとづく発言の持つ閉鎖性を打破することはきわめて困難なのである。ことに自動車を対象とする場合には、である。こうした性格が、一種の危険性に連続するのだが、「経験とともに始まるが、それがすべてではない」という古

くからの命題を生動させるのは、結局、「文体」にひとえにかかっているともいえよう。「カー・グラフィック」は、ひとつの固有の文体をもつことをめざし、そしてそれに成功している雑誌でもある。

このたび、この「カー・グラフィック」誌が図書館に継続購入されることになった。自動車雑誌諸誌に対する学生諸君からの購入希望にもとづき、図書館としていろいろな検討を加えた結果の決定である。予算をこえる購入希望図書の上積する図書館としてはまことに思いきった決定なのだが、社会現象、文化現象としての自動車の重要度を考慮して、本誌を選択した次第である。というより、ひとりのすぐれた編集者の感覚、判断、批判、思考そして表現を信頼して、といってもよい。出来うれば、図書館内で閲覧できる米、独の「TIME」「Spiegel」両誌の自動車関係の記事、論文（広告でもよいのだが）を読みあわせて、「カー・グラフィック」誌の諸判断を検討していただきたいと思う。

（ドイツ語）

投 書 箱 か ら

「いつも利用させてもらっています。一つ提案なのですが、自動車関係の雑誌が、一つくらいあっても良いと思うのですがどうでしょうか。ここの図書館の方針にそわなければしかたがありませんが、どうでしょうか。モーターファンなどが良いと思うのですが」

化学科3年

（原文のまま）

上記の提案は5月26日に開かれました、教養図書館運営委員会に計られ、ご提案の『モーターファン』をはじめ、他の自動車関係の雑誌・予算等を含めて検討致しました。ご提案の『モーターファン』は残念ながら購入決定とはなりませんでしたが、代りに『カーグラフィック』を購入することに致しました。選定の理由等を含めてこの雑誌の紹介を運営委員の一人である前田先生にお願いしました。

「落語を読む」

岡 野 安 洋

落語が文字になったのは、何も目新しいことではない。明治時代にはすでに落語の速記本があり、名人といわれた三代目 柳家小さんや橘家圓喬の噺が文字にされ、大衆娯楽の一つとなっていた。そうした速記本では、例えば、三代目小さんの『たらちね』とか圓喬の『鯉沢』というように、演者が高座で語っている語り口を、時には身ぶりを表わす言葉を添えて文字にしていたのである。

しかし、現在文庫本で出ている『古典落語』（講談社）などという本では、あたかも一人の落語家が話しているように書いてはあるが、それはいわゆる落語家なる者が話しをしているの

であって、特定の演者ではないのである。つまり無個性な落語家が噺の筋を語っているにすぎないのである。私は落語というものは個人、個人の個性に従って落語家が自分流に噺を料理して聞かせるところに醍醐味があると考えている。だから無個性な落語など意味がないと思うのである。だが一方ではもちろん、『桂 文楽全集』とか『林家正蔵全集』などというように、何巻か組になっている立派な装幀の高価な本も出版されてはいる。しかし、長屋噺や遊里の噺を、おもむろに机に向い、大真面目に読むなどということは、それこそ滑稽なことと言わなくてはなるまい。それでもようやく最近では、手軽に

寝っころがったり、電車の中で読んだりするのに適当な大きさの版で、しかも演者の個性をよく伝えている本が出はじめた。『志ん生〇〇ばなし』（立風書房）シリーズや『圓生古典落語』（集英社）などがそれである。しばらくぶりに落語を読む楽しみが、大衆のもとへと戻って来たといえる。

そこで早速買って読んでみたが、どうもさっぱり面白くない。たしかにくすぐりの所などは思わず声を出して笑ってしまうこともあるが、一回読むと二度と読む気にはなれない。何回かくり返して聞いて楽しめるレコードやテープとはちがうのである。一体どうしてなどと深く考えるまでもなく、落語はあくまでも話芸であるから、演者の声の抑揚や間を感じることでできない文字ではどうしても楽しめないのである。一例を上げてみると『寝床』という噺があるが、義太夫好きで好人物の店の主人は、何かにつけて自分の義太夫を店の者や長屋の連中に聞かせたがる。しかしその義太夫たるや下手を通り越して、人体に悪影響を及ぼすというひどいものである。そこで店の者や長屋の住人は何やかやと口実をつくっては逃げようとする。怒った旦那は「店の奉公人は暇を出し、長屋は明け渡せ！」と言い出すありさま。そういう穏かならぬことになったところで老獺な番頭が出てきて、旦那をなだめたり、すかしたりして怒りを和らげようとする。旦那はただすねているだけで、根は人が良いから、すぐ機嫌を直して義太夫を語りたいのだが、さんざん怒った後なので、どうも具合が悪い、そこで

『おまゝはね、そう言うけど。そいじゃ、あたしがね、だれるじゃないか。え——、そうでしょ。』

うん？そんなこと言ったら、何だかあたしが芸惜しみしているように聞こえるじゃないか。

えっ、なんだって長屋の連中がもう来てるって、そうかい。

困ったねー。

そいじゃなんだ、こうしよう。おまゝの顔を立てて、一段だけでも語るとしようかね。」と心の中では承知したくとうずうずしているのに、いやいやながらというように番頭の出した助け舟に乗る場面がある。これは文楽の口演から抜き書きしたものであるが、文字を読んだだけで文楽が演じる旦那の心の動きやおかしさが十分に理解できるであろうか。あの文楽の自在な声の使い方と間は到底理解できないだろう。私の小学生や中学生の頃、父親につれて行かれた寄席の高座で演じられていた文楽の落語は、文字で置き換えることを許さないほど完成された話術であったように思える。

ところで落語といっても様々な種類があり、調子の良さや間で笑わせるものもあれば、滑稽さより、じっくりと人の情を話すものもある。いわゆる人情噺である。昨年から今年にかけて『圓生人情噺』（中央公論）という三冊の文庫本が出された。噺自体の内容も豊かで、腰を落着けて読めるので、これなら文字で読んでも結構楽しめる。特に三冊目の『真景累ヶ淵』は圧巻といえる。三遊亭圓朝作のこの噺は、単なる因果噺、怪談噺の枠を越え、登場人物が時代を背景として実在感を持っているが、圓生はこの噺に磨をかけ、現代人にも分りやすく、すっきりとした語り口の中にも人間の持っている業の凄まじさをよく表わしている。とりわけ前半の江戸を舞台としているところなど、圓生持ち前のはぎれの良い口調が文字を読んでも楽しめた。これなら本を読んでも十分に満足できると感じたが、その裏では、内容的な深みをそなえた作品であれば文字でも楽しめるが、内容が余りなく話術の面白さで楽しむべきものは、文字で読んでしまったら味気なくなってしまうということの証明でもあったのである。しかし、人情噺にしたところで所詮文字で読むのは邪道であり、寄席の高座で聞いてこそ真の噺なのである。（ドイツ語）

訂正とお詫び

前号(30号)に掲載致しました推薦図書リスト中に脱落と誤記がありましたので、下記のとおり訂正させて載せます。読者にも関係の先生方にも深くお詫び申し上げます。

入手齋雄〔数学〕

戦争と平和 ㊦ 983/To47h/V1~V8

トルストイ著(米川正夫訳)

1967 岩波書店

罪と罰 ㊦ 983/D88t/V1~V8

ドストエフスキー著(中村白葉訳)

1970 岩波書店

権力とたたかう良心(ツヴェイク全集17)

948/Z9/17

ツヴェイク著(高杉一郎訳)

1974 みすず書房

神達章子〔数学〕

夜と霧 946/F44/C2

フランクフル著

1974 みすず書房

猫と鼠 943/G77

グラス著(高木研一訳)

1972 集英社

後世への最大遺物 190.4/U19

内村鑑三著

1969 岩波書店

ニュルンベルク裁判

マーザー著(西義之訳)

1979 TBSブリタニカ

積みすぎた箱舟 480.4/D88a

ダレル著(浦松佐美太郎訳)

1977 暮しの手帖社

坂入 清〔独語〕

学生に与う ㊦ 159.7/Ka93g/V1

河合栄治郎著

1975 社会思想社

論語 ㊦ 123.83/Ko84

貝塚茂樹訳註

1979 中央公論社

ファウスト ㊦ 942/G56

ゲーテ著(手塚富雄訳)

1974 中央公論社

独学のすすめ 370.4/Ka86

加藤秀俊著

1975 文芸春秋社

前田富士男〔独語〕

神さまの話 ㊦ 943/R43

リルケ著(谷友幸訳)

1973 新潮社

神話作用 954/B25

バルト著(篠沢秀夫訳)

1980 現代思潮社

精神史(林達男著作集1) 081.6/H46/1

林達男著

1971 平凡社

調書 953/L49

ル・クレジオ著(豊崎光一訳)

1966 新潮社

芭蕉七部集評釈 911.32/A47

安東次男著

1973 集英社

立川昭二〔歴史学〕

ガン病棟(上)・(下) 983/So35/V1~V2/C2

ソルジェニーツィン著(小笠原豊樹訳)

1969 新潮社

方丈記私記 914.6/H96h/C.2.

堀田善衛著

1971 筑摩書房

医学の哲学

澤瀉久敬著

1971 誠信書房

椿の海の記

914.6/I78

石牟礼道子著

1976 朝日新聞社

自註鹿鳴集

911.168/A26

会津八一著

1965 中央公論美術出版

慰めの音楽

760.4/D84

デュアメル著(尾崎喜八訳)

1974 白水社

閲覧ニュース 31号

1981. 7 発行

北里大学教養図書館

発行責任者 小 野 健 一